

---

# Spiral Fortune

おに

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Spiral Fortune

### 【Nコード】

N7478Y

### 【作者名】

おに

### 【あらすじ】

人類が地球を旅立ち数百年後。一部の人類が見つけた新天地で、ひとは新たな能力を得る。その発現は人類の六割にも達し、法と制御装置で制限を設け秩序は保たれていた。だがいわゆる超能力を使った犯罪も多発し、これを取り締まるための特殊訓練を受けた者たちを『ハンター』と呼んだ。大切なものの失い心に傷を負ったハンターの青年と、平凡な大学生の娘が事件を通して出会う。本当なら何の接点もないはずの二人が出会い、次々と事件に巻き込まれてゆく。本当の理由とは――。

## 1 緋色の追跡者（前書き）

二人の主人公で物語が進行します。

## 1 緋色の追跡者

首都ラナケスの中心街に、けたたましいサイレンの音が響く。

商業区域のビル群に黒煙があがり、緊急車両が次々と転送ポータから姿を現す。そして車両専用高速チューブを、埋め尽くしていた。

その下の歩行者専用道路や、ビルの中などから人々が好奇心と不安な顔を浮かべつつ、黒だかりを作る。

しかし、すぐに消防や警察だけでなく黒い軍車両が集まり始めたことで、野次馬していた市民にも困惑の色が濃くなる。

「下がって下がって！ 危険ですから、中に入らない！」

もうもうと立ち上がる黒煙を中心に警戒区域として封鎖し、人々を誘導し始める警察。

それを尻目に、黒塗りの装甲車が人々の流れに逆らうように入っていく。

「現場の状況は？」

黒塗りの車両の中で、モニターを睨み男が通信を交わす。

「潜伏先は確認済みだ。2A8エリア内アナ劇場。逃げ遅れた一般人は確認できるだけで十五人——これから転送もしくは誘導する。リヨウ、サポートを頼む」

「了解」

通信を終えると男は立ち上がり、車両を降りた。

ビルの屋上に、ひとりの男が立っていた。

黒い出で立ちに、人目を引く赤色の髪がビル風になびく。

足元からひとつ向かいにあるドーム型施設に、鋭い視線を落とす。腰にはガンベルトを巻き、銃が収められている。肩と胸、肘には薄い軽量型プロテクター。耳元には通信用イヤホンと、耳たぶには合わせて五つの能力制御リングがはめられている。

風がひと時止むと赤一色だと思われた髪は、金に近いブラウンをベースに、幾筋も燃えるような緋色の髪が流れ、見た者に忘れられない印象を与える。

分厚い戦闘向きの軍用ブーツでビルの屋根を蹴る。そのままビルから歩き出すように身を乗り出すと、そのまま重力に逆らわず降下してゆく。

目標は黒煙を上げ崩れゆく目前の劇場。

落下しながら、赤毛の男は一瞬で消えた。

## 2 脱出

「早く、こつち!」

ルウは座席の下に手を差し出し、小さな手を取る。

少女は恐怖のあまりイヤイヤと首を振り、泣きながら縮こまって震えていた。

「大丈夫だから、ね? ママが待ってるよ」

「——ママ?」

五歳ほどだろうか、少女がようやく大きな瞳をこちらに向けてくれたことに安堵しながら、狭い座席の間にさらに身を乗り出す。

背もたれのクッションがあるとはいえ、椅子に背を挟まれ痛みに顔をゆがめながらも、おずおずと差し出された小さな手を、ルウはしっかりと握り直す。

そして力の限り引き寄せた。

「おねえちゃん!」

ようやく腕の中に少女を収め、ルウはひと息つくと、真つ暗な周囲を見回した。

「大丈夫よ、必ずママに会えるから。お姉ちゃんと一緒にお外に出ようね?」

ススだらけの顔で、ルウは少女に微笑んで見せた。  
それが少々滑稽だったのか、ようやく少女は笑顔を浮かべてくれる。

「怪我は、痛いところはない?」

こくんと小さく頷く。

それを見てほっとしながらも、ルウの胸の不安は拭えない。

——そもそも、どうしてこんな事になったのかさえ、ルウにはさっぱり分らないのだ。

今日はこの『アナ劇場』に、大学のレポートの為に観劇に来ていた。

同じゼミの仲間たち数人と訪れ、ちょうど帰宅の途につくところだった。突然の爆発音に建物が揺れ、退出しきっていない客達がパニックを起こし、慌てて外に出ようとしたところで二回目の爆発が起こる。そこでルウは崩れた二階部分とともに落ちたのだ。

幸いに崩れた座席に乗るかたちで着地したため、怪我は負わなかったが、これで出口が遠のいた。

二回目の爆発によって照明が落ちたため、ルウは手探りで周囲の状況を確認めるしかすべがなかった。声を上げてても返事かないのは、幸か不幸か。少しだけ考えて、落ちた自分と瓦礫の下敷きになった者がいないのなら、たったひとり残されたとしてもこれは『幸』だと思っておくことにした。

一回目の爆発の前に友人達と別れたルウは、買い忘れた観劇のパンフレットを買いに戻ったところだったのだ。少なくとも友人たちは脱出したはずだから、このままルウが戻れなくともきつと搜索を警察に頼んでくれるだろう。

少しだけ落ち着きを取り戻すと、かすかに子供のすすり泣く声に気付く。

まさか、とルウの鼓動が跳ねる。

「落ち着け」と耳をドクドクと波打つ鼓動を抑えつつ、辺りに気を配る。

どうやらルウのいる場所から少し離れたところから、その声が発せられたようだ。

ルウは手探りで進み、黙って声を頼りに近づく。そして見つけたのだった。

少女を助け出し一安心するとうやく冷静になり、ルウは思い出したように手首にはめられたメモリーリングを起動させる。小さなモニターが現れ、目を開いているのかさえ分からなくなるほどの暗闇を照らす。少しだけ足元が明るくなる。

明かりに反応したのか、身をすくめ不安そうな少女の顔が振り返る。

「少しでも安全な場所まで移動しましょうね？」

モニターの明かりで劇場内に舞い上がる埃とは別に、かすかに煙が漂いはじめたことに気付く。そしてルウはハンカチを取り出し、少女の口元にあてて後ろで縛り、簡単なマスクとする。

少女を手招きして、二人で四つんばいで移動を始めた。

早くしないと、いつ本格的に火の手が上がり煙にまかれるか分からない——ルウは焦りはじめる。

少女はその只ならぬ状況が察したのだろうか、素直について来る。

「……確かこっちに」

扉があつたはず、と手首の明かりを前にかざす。

するとそこには大きく崩れた壁と瓦礫。そしてその向こうに扉があつたことに心底ほつとしながら手をかけるが、びくともしない。

「お姉ちゃん、出られないの？」

「大丈夫よ、きつと出られるから待ってて」

ルウは扉の前に散乱する瓦礫を持ち上げる。

「危ないから、ダメよ。手を切ってしまうわ」

手伝おうとする少女を制止して、微笑んでみせる。

だが、少しでも急いだ方がいいことはわかっていた。必死に瓦礫を移動させながらも頭にもたげる最悪の事態を、振り払う。

もしこれがただの事故による爆発でなかったなら。

もし『誰か』が意思をもってこれを引き起こしたのだとしたら。

もしその『誰か』が、必死に脱出しようとしているルウたちに気付いたら……。

次の瞬間、ルウの背筋が凍り、ドクンと心臓が跳ねる。

得体の知れない恐怖心に縛られ固まった身体を、なんとか息をしてほぐし己の耳にあるピアスに触れる。

——なんとかしなきゃ。

ルウは傍らの少女を引き寄せ、腕の中に収める。

——能力者、だ。

空気を震わせるその波動に、ルウの全身の毛穴が開く。

最悪の事態。

重犯罪者の能力暴走による破壊及び殺傷行為——

逃げなきゃと思うのだが、足がすくんで動けなかった。

この暗闇の中、わずかな明かりがあるとはいえ瓦礫と煙を避けて、あんな爆発を起こせるような能力者から逃げ切れるのだろうか。

不安と焦りで身体がこわばる。

焦るルウの目の前、瓦礫の上に力場の渦が小さく巻き起こる。

ハッとして息を詰めるルウは、すぐにそれが能力の磁場であると分かり、身構える。

——見つかった

次の瞬間、ふわりと羽が舞い落ちるかのごとく人が降り立つ。

——レポート瞬間移動！

目の前に背の高い黒尽くめの男が、背を向けて立っていた。細身だが防護服につつまれた身体のことかしこに武器が収められている姿は、まさに軍人のそれに近かったが、いくぶんか軽装であ

った。見上げると淡いブラウンの髪には幾すじかの印象的な緋色が混じる。

啞然と見守るルウと少女を、男はゆっくりと振り返る。

整った顔立ちは厳しく、状況を見て取ったようだ。切れ長の鋭い赤紫の瞳が、射るように向けられた。

男は何も言わず、己の手首に収められた通信機を起動する。

「最後の生存者二名を確認。そちらに送るから、受け取れ」  
よく通るその声に、なぜかルウの身体が震えた。

男は二人に近寄り膝をつく、怯える様子を無視して言う。

「王軍領域自衛部隊、第三衛隊所属ハンターだ。ここは危険だ、今から安全な場所に転送する。フライベートメモリ P.Mを見せろ」

それだけ告げると返事も聞かずに、ルウと少女の腕を取り、そこに付けられている個人情報を引き出す。

ハンター……このひとが。

ルウは驚きを隠せない。彼らハンターは軍に所属しているが、軍人ではない。今回のような能力による暴走や犯罪を取り締まるために、特別に訓練を受けた能力者たち。こうして彼らがやってきたというのなら、疑いは確信に変わる。やはりここにいるのだ。さきほど感じた、恐ろしい気配の能力者が……。

啞然としてされるがままだったルウは、彼が情報を読み取って眉を寄せるのに気付く。

すると男は再び通信器に触れる。

「リヨウ、転送は一人だけだ。のこりは直接連れて行く……ああ、そつだ。了解」

通信を終えた男が、ルウの腕の中から少女を引き取るうとした。ルウは咄嗟に力をいれ、自分でも考える前に少女を抱きこんでしまった。

ハッとしたルウを、男は責めるでもなく真っ直ぐ見つめる。

「あ、あの……」

「あんたは転送できないから、この娘だけ先に送る。大丈夫だから、離してくれ」

ゆっくりと言い聞かせるようなハンターの男にルウは小さく頷くと、強ばる手を何とか開く。

そして抱え込んでいた少女に、安心させるように微笑んだ。

「お姉ちゃんの後で行くからね、先に行ってママに会っていてね？」  
大きな眼を不安にゆらしながらも、少女はこくと頷くとしがみついていた手を離す。

赤毛の男はほっと安堵したような表情を一瞬だけみせると、少女を受け止める。

「眼を閉じて」

立たされた少女がぎゅっと目を閉じると、磁場の風を巻き起こしながら一瞬で消えた。

ルウは心底ほっとした。これで彼女は安全だ。あとは軍が保護して母親を捜し、引き渡してくれるだろう。どうか母親も無事であつてくれと、祈るしかなかった。

現れてからほんの一、二分で少女を送り返した男が振り返る。

「あんたは俺とともに脱出する——来い」

ルウは差し出されたその手を取り、歩きだした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7478y/>

---

Spiral Fortune

2011年12月2日02時46分発行